

今回から篠塚病院の細谷光代薬剤師にお願いして、パーキンソン病治療薬のお話しを2回にわたってしていただくことにします。細谷先生よろしくお願いいたします。

パーキンソン病治療薬は多数あります。L-ドパとドパミン受容体作動薬がその代表ですが、それぞれに特徴があり、効き方も異なるので、患者さん一人ひとりに合わせてできるだけ効果が高く、副作用が出にくいように組み合わせて使います。

早めに治療を開始して、早くよくなりましょう。薬は一人ひとりの症状や年齢、活動度などによって異なります。長期治療中に、薬の効果持続時間が短くなったり不随意運動が出ることがありますが、これを改善する薬もあります。主治医とよく相談して薬を飲みましょう。

パーキンソン病はドパミン（神経伝達物質のひとつ）を十分作れなくなる病気ですので、ドパミンの不足を何らかの形で補うことが治療の中心です。できるだけ副作用が少なく、高い効果が得られるように多くの薬が開発されています。病気の経過は患者さんにより様々で、その時点で必要な薬の量や種類も患者さんによって様々です。それぞれの患者さんのその時期の状態に合わせて薬の種類、量、組み合わせを選択

して治療します。

1. パーキンソン病治療薬の特徴 L-ドパ合剤

ドパミンを補充する薬です。L-ドパは血液の中でもドパミンに変わってしまうので、効率よく脳内に移行させるために、ドパミン脱炭酸酵素阻害薬との合剤が通常使われます。L-ドパ・カルビドパ配合（10：1）には、メネシット、パーキストンなどがあります。L-ドパ・ベンセラジド配合（4：1）にはマドパーなどがあります。服用後は、胃内で溶解し上部腸管で吸収され、大脳線条体でドパミン神経終末に取り込まれて作用すると考えられています。

効果が高く、効果出現が早いのが特徴で初期から進行期まで効果がありますが、進行すると1回の服用ごとの効果持続時間が2～3時間と短くなることがあります。特に若い人では、大量の服用でウェアリング・オフ現象や不随意運動が出現しやすい薬です。

薬の吸収や効果は食物に影響を受けやすく、高タンパク食（豆腐・大豆・うなぎ・卵・肉）を食べ過ぎると吸収が悪くなって効き目が落ちることがあり、ビタミンCでは吸収が高まり、ビタミンB₆や鉄剤で効果が減弱しますので注意してください。

ドパミン受容体作動薬

パーキンソン病と薬（1）

細谷光代

ドパミンの作用を補充する薬で、L-ドパと並ぶ代表薬です。ドパミンのようにドパミン受容体に結合することで、ドパミン補充と同じ効果を示す薬です。成分により2種類に分類されます。麦角（ばっかく）系のパーロデル（コーパデル）、ペルマックス、カバサーと、非麦角（ひばっかく）系のドミン、ビ・シフロール、レキップがあります。どちらの種類でも効果はほぼ同じですが、副作用は、麦角系では心臓弁膜症や肺線維症が、非麦角系では突然の眠り込み発作が起こりえます。

ドパミン遊離促進薬

ドパミンの放出を増やし、ジスキネジアを改善する薬です。シンメトレル、アマゾロンなどは、ドパミンの合成を促したり脳内のドパミンの流れを活発にします。その結果、ドパミンによって働く神経の活動が増してパーキンソン病の症状に対して効き目を現すと考えられます。

MAO-B 阻害薬

L-ドパを分解する酵素（MAO-B）の働きを抑えてドパミン量を維持する薬です。エフピロは、脳内でL-ドパの作用を強く長くすることで、ウェアリング・オフ現象を改善します。

COMT 阻害薬

L-ドパを分解する酵素（COMT）の働きを抑える薬です。コムタンは、一緒に飲んでるL-ドパの働きを長くしてドパミンの量を維持し作用時間を長くし、ウェアリング・オフ現象を改善します。

ノルアドレナリンのプロドラッグ

進行により減少したノルエピネフリン（神経伝達物質のひとつ）を補充する薬です。ドプスは、L-ドパ抵抗性のすくみ現象、姿勢反射障害、無動症などを改善することがあります。

抗コリン薬

アセチルコリン（神経伝達物質のひとつ）を

抑える薬です。アーテン、トリフェジノンは、脳内アセチルコリンを抑制してドパミンとのバランスをよくし、振戦を改善します。

ドパミン賦活薬

ドパミン合成を増やす薬です。トレリーフは、ドパミン合成を増やしてドパミンの効果を強くし、振戦やウェアリング・オフ現象を改善します。

2. 薬物治療のポイント

症状があれば、あまり我慢せず治療を始めましょう。我慢しすぎて動きが悪くなってしまうと、二次的に関節が拘縮（こうしゅく）し、伸ばしにくくなってしまったり、筋肉を使っていないために筋力が弱くなってしまいます。軽度であれば早く症状が改善し、ほとんど症状が消えてしまうことも少なくありません。その後も経過に合わせて薬を調節していけば、動きやすい状態を維持しやすいと考えられます。体を動かしているほうが症状が改善されるのは疑いなく、症状が軽いほど体を動かしやすいのも確かです。症状があるのに、副作用を心配するあまり、薬による治療を遅らせることはお勧めできません。我慢しすぎず、早めの治療を受けることが大切です。

パーキンソン病治療薬は、次々に開発されています。神経細胞を元気にしたり、病気の過程を遅らせたり、あるいは今までとは発想の異なる薬の開発も期待されています。新薬の開発が進行する中で、皆さんは早く適切な治療を受け、ご自分でもできるだけ体を動かすように心がけて、今の状態をできるだけ良い状態で維持するようにしましょう。

次回は、薬の飲み方の注意点や副作用に関して、わかりやすく解説していただきます。どうかお楽しみに（M.T.）。